

宮沢賢治作品における造語構造および造語機能の分析

— 童話 「やまなし」 に見られる〈クラムボン〉に絡めて —

鈴木 健 司

一 はじめに

宮沢賢治作品には、造語と思われるものが数多く存在し、作品の魅力となるとともに難解さの原因ともなっている。代表的なものとして、童話「やまなし」に見られる〈クラムボン〉を挙げることができる。童話「やまなし」は、四〇年以上にわたり小学校教科書（光村図書、小六国語）教材として取り上げられており、なかでも〈クラムボン〉の存在は、教師と児童を悩ませ続けている。〈クラムボン〉とは何か、という問いは長年続けられてきたが、その試みは未だ成功していない。一方で、意味のわからないところに作者の意図があるという逆説的な論が提出され、それなりの支持を得たと言えるだろう。西郷武彦『宮澤賢治「やまなし」の世界』（一九九四・一〇）は、原稿用紙にせずか一〇枚程度の「やまなし」を論ずるに、三八五頁からなる一著を世に問うた。おびただしい先行研究を丁寧に取り上げ検討を加え、その後、

自説としての仏教的な世界観からの作品分析を展開し、〈クラムボン〉の「仮名（けみょう）」説を提示している。私は、西郷の「やまなし」論を、肯定的に捉えるものだが、拙論『ペンネンネンネン・ネネムの伝記』試論（『日本文学』第41巻第2号、一九九二・二）において指摘した、「やまなし」に見られる重層的な《空間構造》に関しては、西郷論において包含されていない。「やまなし」は今後も、魅力と謎を発し続けることだろう。本論においては、宮沢賢治作品における全体的な造語構造と造語機能を分析し、その延長上に〈クラムボン〉を位置づけ、西郷論とはやや異なる視点から〈クラムボン〉を論ずるつもりである。

二 造語構造と類別

宮沢賢治作品の中には、難解な語、意味不明な語が数多く存在する。その中には造語と推定される語がかなり

の割合含まれていると判断される。少し詳しく見ると、造語と推定される語の例は詩作品には少なく、逆に童話作品に頻出する。賢治は、詩作品を〈心象スケッチ〉と規定しその記録性を主張しているので、たとえ難解な語句であつたとしても、読み手の知識量の増加に比例して理解度が高まっていく。それに対し童話作品は〈イーハトヴ童話〉と規定しており、「イーハトヴ」という語自体が造語であることから推定されるように、自在に日本語を変化させ、さらには、既存の日本語に見出すことのできない語を創出する。そのような語は、地名・人名・物名、オノマトペに多く指摘できるが、本論においては、童話「やまなし」の〈タラムボン〉を考察の最終地点に置いているため、オノマトペにおける造語性には触れることができない。さらに、膨大な下書稿に含まれる造語と思われる語も分析対象となっていない。その意味でも、本論は試みに止まっていることを記しておきたい。

難解で意味不明のため造語ではないかと推定されていた語が、文学以外の領域の専門家（例えば、仏教学、民俗学、地質学、化学、天文学など）にとつては自明の用語であつたり、宮沢賢治の生まれ故郷の人たちにとつては、周知の实在の地名であつたりすることがある。そのような例を次に示す。〈インドラの網〉〈阿耨達池〉〈ウエー

ツサンタラ大王〉〈ナムサダルマブフンダリカサーストラ〉〈十力〉〈白象〉〈ヘッケル〉〈ダルゲ〉〈流沙〉〈沙車〉〈ケンタウル〉〈大鳥の星〉〈蠍の星〉〈金牛宮〉〈参の星〉〈山男〉〈犬神〉〈山猫〉〈鹿踊り〉〈二十六夜〉〈おとら狐〉〈さしき童子〉〈ザシキワラシ〉〈インドの虎狩り〉〈爾薩待〉〈七つ森〉〈狼森〉〈笹森〉〈盗森〉〈黒坂森〉〈燧石の山〉〈丹藤川〉〈葛丸川〉〈大空の滝〉〈更木〉〈実相寺〉〈北島の毘沙門さん〉〈獅子鼻〉〈煙山〉〈バイオタイト〉〈オーソクレース〉〈コングロメレート〉〈ブラヂオクレース〉〈ダイク〉〈火山弾〉〈岩頸〉〈蛋白石〉など、枚挙にいとまがない。賢治の造語と判断される語を造語構造の視点から見た場合、三つの類型に分けることができるように思う。①既存の語を組み合わせたもの。②既存の語をもとに、字の入れ替えや、付加、脱落等のひねりを加えたもの。③既存の語に類例や語源を見出すことができないもの。それぞれ例を挙げつつ分析をする。

①既存の単語の組み合わせによるもの

代表的な例として〈銀河鉄道〉を挙げることができる。銀河と鉄道はそれぞれ常識的な語であるが、それを組み合わせた結果としての〈銀河鉄道〉は、新たな意味をまとつた語となる。〈蝸の火〉〈貝の火〉〈よだかの星〉〈

茨海小学校) (飢餓陣営) (化物丁場) (虔十公園林)
(光炎菩薩太陽) (バナナン大将) (北守將軍) (鳥箱
先生) (植ノ木大学士) (ウルトラ大学生) (はりがね
せい、ねずみとり氏) (ベゴ石) (さいかち淵) (ケン
タウル祭) (ビジタリアン大祭) (北極兄弟商会) (山
猫博士) (猫大将) (氷河鼠) (電気栗鼠) (鳥捕り)
(ねずみ競争新聞) (サンタ マグノリア) (水仙月)
(雪童子) (雪狼) (雪婆んご) など。片方の語が賢治
の造語で、それと既存の日本語を組み合わせた(イーハ
トーボ農学校) (イーハトヴの友) (貝の火兄弟商会)
のような例もある。

② 既存の語彙をもとに、字の入れ替えや、付加、脱落
等のひねりを加えたもの

カッコ内に実在の語彙を示す。(富沢) (宮沢)、(藤原
慶次郎) (藤原健次郎)、(青金) (赤金)、(笛ふきの
滝) (笛貫の滝)、(源五沼) (五郎沼)、(トロメライ
〜) (トロイメライ)、(ロマチックシューマン) (ロベル
トシューマン)、(ユグチュユモト) (湯口湯本)、(ハー
ナムキヤ) (花巻)、(モリーオ) (盛岡)、(センダー
ト) (仙台)、(イーハトヴ) (岩手)、(トーキオ)
(東京)、(トバスキー・ゲンズスキー) (鳥羽源蔵)、(ヨー
クシャイヤ) (ヨークシャー)、(バアクシャイヤ) (バー

クシャー)、(オリザ) (稲)、(テジマア) (手品) な
ど。

③ 既存の語に類例や語源を見出すことができないもの
この例が最も多いが、研究が進むにつれ、①または②
に分類し直される可能性がある。「やまなし」の(クラム
ボン)がこの類に分類されるため、他の語との比較の便
を考慮し、作品名も併せて取り上げる。下位分類が必要
なため、A類とB類として表す。

A類は単純な語呂合わせのようなもので、法則性も見
いだされる。例えば、「カイロ団長」に登場するアマガエ
ルの名前の(ブチュコ) (ビキコ) (ベツコ)である。
バ行の音を動かしながら、「コ」という愛称のような語尾
を付けた造語である。単純といえばそれまでだが、その
単純さが個性の差を必要としないアマガエルたちの造語
法として効果を上げている。

B類は(カイロ団長)という造語がよい例となる。ト
ノサマガエルであるカイロ団長は、権力者としてアマガ
エルたちに君臨する個の存在であるため、アマガエルた
ちとは異なった造語法が用いられる。では、(カイロ団
長)という語はどのようにして作られたのか。カイロ+
団長という、二語の組み合わせ(①のパターン)という
ことはわかるが、カイロに意味があるのかないのか判断

がつかない。それゆえ、①のパターンに分類できないのだが、カイロを薙露と置き換えたら、意味が発生してくる。賢治の詩に「薙露青」（薙露＋青はおそらく造語）があるので、カイロを薙露と置き換えることの根拠になる。薙露は、人の世のはかないことや、人の死を悲しむ涙をいう語なので、「カイロ团长」とは、どんなに権力をもっていたとしても、しよせん一時的ではかないことだということを象徴的に示していることになる。

A類

- 「黒ぶだう」〈ベチュラ公爵〉〈ヘルバ伯爵〉
- 「タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった」〈西風ゴスケ〉〈北風カスケ〉
- 「蛙のゴム靴」〈カン蛙〉〈ブン蛙〉〈ベン蛙〉
- 「手紙四」〈ポーセ〉〈チュンセ〉
- 「双子の星」〈チュンセ童子〉〈ポウセ童子〉
- 「黄いろのトマト」〈ベムベル〉〈ネリ〉
- 「鳥箱先生とフウねずみ」〈フウねずみ〉
- 「クンねずみ」〈クンねずみ〉
- 「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」〈ペンネンネンネンネン・ネネム〉〈マミミ〉〈ハンムンムンムンムン・ムムネの市〉〈フウフイーボー先生〉〈ペンペンペンペンペン・ペネム〉〈ケンケンケンケンケン・

クエク警察長」〈フイーガロ、フイガロト、フイガロトト〉

- 「北守將軍と三人兄弟の医者」〈リンパー〉〈リンパー〉〈リンポー〉〈ソンバーユー〉〈ラユー〉
- 「グスコープドリ」の伝記」〈グスコープドリ〉〈ネリ〉
- 〈グスコーナドリ〉〈クーボー大博士〉

B類

- 「貝の火」〈ホモイ〉
- 「鳥の北斗七星」〈マジエルの星〉
- 「水仙月の四日」〈水仙月の四日〉
- 「オツベルと象」〈オツベル〉
- 「鳥箱先生とフウねずみ」〈カマジン国〉
- 「ガドルフの百合」〈ガドルフ〉
- 「グスコープドリ」の伝記」〈サンムトリ〉〈カルボナード島〉
- 「セロ弾きのゴーシュ」〈ゴーシュ〉
- 「タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった」〈ホロタイタネリ〉
- 「イーハトーボ農学校の春」〈カイロ男爵〉〈風野又三郎〉
- 「蛙のゴム靴」〈ペネタ形〉〈ヘロン〉〈パッセン大街道〉

「雁の童子」〈須利耶圭〉

「猫の事務所」〈ウステラゴメナ〉 〈ノバスカイヤ〉 〈フサ河〉

「谷」〈檣渡〉

「樋ノ木大学の野宿」〈ラクシヤンの四人兄弟〉 〈ヒムカさん〉 〈熊出街道〉

「畑のへり」〈カマジン国〉

「鳥箱先生とフウねずみ」〈カマジン国〉

「とっこべ、とら子」〈とっこべ、とら子〉

「二十六夜」〈疾翔大力〉 〈爾迦夷〉 〈鳥鴉守護章〉 〈捨身大菩薩〉

「フランドン農学校の豚」〈フランドン〉

「ポラーノの広場」〈ポラーノ〉 〈レオノ・キユースト〉

「やまなし」〈クラムボン〉 〈イサド〉

「四又の百合」〈ヒームキヤの河〉

「龍と詩人」〈チャーナタ〉 〈スールダッタ〉 〈アルタ〉

「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」〈クラレの花〉

〈サンムトリ〉

「銀河鉄道の夜」〈天気輪の柱〉

「風の又三郎」〈風の又三郎〉

三 造語の機能

造語の機能とは、造語が作品内においてどのような役割を果たしているか、ということである。その造語の機能は二つの類型に分けられると考え、それをi類とii類とする。i類は、作品世界をまるごと造語で構成する方法である。その世界は寓話風となる場合が多い。ii類は、さらに下位分類が必要で、a型、b型、c型で表す。a型は、実在する場所を舞台として用いながら、そこに造語を潜ませる方法で、b型はいかにも実在しそうな場所を舞台として用い、そこに造語を潜ませる方法である。c型は造語で作品舞台を構成しつつ、そこに実在の語を潜ませる方法である。

まずは、i類から見えていく。「クンねずみ」を例として用いる。主人公の「クンねずみ」は、「エヘン、エヘン」と威張ることしかできない性格で、ねずみ仲間から殺されそうになる。その時猫大将に助けられ、猫大将の子供の家庭教師になるが、「エヘン、エヘン」と威張ってしまう、結局子供に食べられてしまう話である。「ねずみ競争新聞」なるものがあり、「ツエねずみ」が「はりがねせい、ねずみとり氏」に捕獲された記事や、「カマジン国」の飛行機が「プハラ」を襲った記事が掲載されるなど、造語を駆使した手の込んだ寓話作品になっている。

〈タねずみ〉 〈ぺねずみ〉 〈テねずみ〉も登場する。

「ガドルフの百合」も*i*類であろう。旅人の〈ガドルフ〉とはどのような存在なのか、〈百合〉はなぜ登場するのか。〈百合〉は造語ではないが、〈ガドルフ〉と組み合わせた場合、象徴的な存在となり、造語に似た働きを持つ。この作品に寓意はないが、象徴があふれている。

「オツベルと象」も*i*類に入ると考える。作品舞台はどこか、なぜ〈オツベル〉なのか、月がなぜ〈サンタマリア〉と呼ばれるのか。〈白象〉の存在もよくわからないからだ。ただ、〈白象〉を聖なる存在と捉えるなら、そこに意味が生じることになる。造語が意味を持つということは、実体を持つことになるので、造語としての機能が弱くなり、また別の分類法を考えねばならなくなる。その点の事情からいえば、「貝の火」も同じような分類上の問題を抱えている。主人公〈ホモイ〉が川で溺れているひばりの子を助けたことにより、王様から〈貝の火〉を授けられるが、〈貝の火〉は造語として見る限り理解不能であり、意味の生じることはない。だが文脈は、〈貝の火〉が宝珠であることを明らかに示しており、意味を生じてしまう可能性が残る。

「フランドン農学校の豚」も*i*類である。農学校の語から、賢治が勤めていた花巻農学校との関連（モデル説）

を指摘することはできるが、それは読者側の問題に過ぎない。〈フランドン〉はヨーロッパのどこかを連想させるだけで、意味を持つことはない。〈ヨークシャイヤ〉（バアクシャイヤ）だが、天沢退二郎は新潮社文庫版の注で、「いずれもイギリスの地名で、その地で成立した豚の種名」と説明しているが、その場合、ヨークシャー、バアクシャーと記すはずで、ヨークシャイヤ、バアクシャイヤと記したところに、造語性が見出せ、あくまで架空の舞台として成立させようとした賢治の意図が読み取れる。ただ、賢治が英語表記から直接読みを導いていた場合、造語とはならない可能性も残る。キャベツがキャベジと表記される例がそれである。

その他、*i*類に分類できる作品を挙げると、「鳥の北斗七星」「水仙月の四日」「グスコープドリの伝記」「タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった」などがある。*ii*類を考える。*ii*類*a*型は、実在する場所を舞台として用いながら、そのなかに造語を潜ませる方法で、「二十六夜」を例に説明する。この作品の舞台として用いられる〈北上川〉〈獅子鼻〉〈実相寺〉は、賢治の生まれた花巻に実在するものである。「二十六夜待ち」という仏教的風習も実在のものである。しかし、梟の坊さんが語る〈疾翔大力〉〈爾迦夷〉〈梟鴉守護章〉〈捨身大菩薩〉

はすべて造語と推定されており、実在の舞台が、造語のリアリティーを保証する仕組みとなっている。「猫の事務所」も同様の仕組みを持っている。猫の事務所は「軽便鉄道」の停車場の近くにあり、旅行案内のような仕事をしている。「ぜいたく猫」がおり「氷河鼠」を食べるために「ベリーリング地方」に行きたいというのだが、その旅程に「函館」が出ており、「函館」の実在は、読者に一挙に「軽便鉄道」が岩手軽便鉄道であることを連想させることになる。それはテキストが読者を誘導しているのである。ベリーリングという語だが、ベリーリング海峡は実在するが、「ベリーリング地方」は存在しない。ここにも造語の仕掛けがある。シベリアを連想させるロシア風の「ウステラゴメナ」(ノバスカイヤ)「フサ河流域」(トバスキー)「ゲンズスキー」も造語である。「学者アラムハラドの見た着物」もii類a型に分類できる。「アラムハラド」(セララバアド)といった造語は、「葱嶺」(阿耨達池)「ヴェエツサンタラ大王」という実在する西域の地名や仏教関連の語彙に囲まれ、躍動している。「なめとこ山の熊」、これもii類a型に含めたいのだが、そのためには、少し説明が必要である。現在の国土地理院発行の五万分の一の地形図では「なめとこ山」が記されている。つまり実在の山ということになるのだが、賢

治の生きていた時代の地形図には記載がない。その経緯は省略するとして、私見ではあるが、賢治が「なめとこ山の熊」を書いた時点では、名前だけが伝聞として残され、「なめとこ山」がどこにあるのか賢治や他の人も理解していなかった。「なめとこ山」は作品の中にだけ実在していたと考える。「鉛の湯」や「中山街道」「大空の滝」(北島の毘沙門さん)は実在のものである。豊沢川上流のどこかに、「なめとこ山」と呼ばれる山があり、その伝承をもとに、「淵沢川」「淵沢小十郎」「三つ又」(サツカイの山)「マミ穴森」(白沢)などの造語を交え、小十郎と熊の物語を創作したのではないかと推定している。「ビジテリアン大祭」や、それを改稿した「極東ビジテリアン大祭」もこの分類だろう。

ii類b型を考える。b型はいかにも実在しそうな場所を舞台として用い、そのなかに造語を潜ませる方法である。「銀河鉄道の夜」や「風の又三郎」などがその型に含まれ、「やまなし」もこの型に分類されると考える。

「銀河鉄道の夜」だが、すでに触れた造語「銀河鉄道」は、どこをどのように走るのか。まず作品舞台の特定だが「ジヨバンニ」(カムパネルラ)の名からすれば、イタリア風である。なぜイタリア風なのか。イギリス風、ドイツ風、ロシア風ではいけないのか。このあたりの問

いに答える用意はないが、〈銀河鉄道〉に乗り込んでくるクリスチャン（かおる）たちの存在を考えると、ローマ・カトリックからの連想で、イタリア風がふさわしいように感じられる。〈銀河鉄道〉に乗り込んでからは、天の川を（北十字）から（南十字）に向かって走っていくが、地と天をつなぐものとして〈天気輪の柱〉という造語が機能する。〈天気輪の柱〉がなければ、ジヨバンニは〈銀河鉄道〉に乗車できなかったように読めるのだが、意味不明の語として、〈天気輪の柱〉は現在も読者、研究者を悩ませている。

「風の又三郎」は、岩手の山中の小学校を舞台にした作品のようだが、場所を現実のどこか特定することはできない。しかし、もし読者が日本人であれば、極めてリアルに場面が想像され、架空の世界とは感じないだろう。そこに造語〈風の又三郎〉が投入され、転校してきた（高田三郎）とイメージが重なることにより、物語が展開する。〈風の又三郎〉は共同幻想として共有される民話的な風の神と思われるが、その機能を想定したうえで造語と考えられる。

ii類c型を考える。ii類c型は造語で作品舞台を構成しつつ、そこに実在の語を潜ませる方法である。「ポラーノの広場」を用いて説明すると興味深い。（レオーノキュー

スト）が誌したものを（宮沢賢治）が訳述するという設定からして奇抜で、どこの国の言語を（宮沢賢治）が翻訳したのかわからないが、〈イーハトーヴォの野原〉という造語は、この地方が〈イーハトーヴォ〉であり、〈イーハトーヴォ〉地方で使われている言語を、宮沢賢治が日本語に翻訳したとなる。通常、固有名詞は発音を残すので、〈イーハトーヴォ〉の言語を考えると参考になる。テキストを離れた視点から言えば、エスペラント語風なのだが、〈トーキョ〉（セントー）〈イーハトーヴォ〉（モーリオ）といった造語は、東京、仙台、岩手、盛岡から創り出されている。このような造語法は、「税務署長の冒険」でも用いられており、〈ハーナムキヤ〉は花巻、〈ユグチュユモトの村〉は花巻にある湯口村、湯本村からの造語である。〈イーハトヴの友〉は地酒の銘柄で、〈イーハトヴ密造会社〉まで存在するといった手の込みようだ。「ポラーノの広場」では〈つめくさの花〉が「銀河鉄道の夜」での〈天気輪の柱〉の機能を背負っている。〈つめくさの花〉はむしろ造語ではなく、造語機能としては「銀河鉄道の夜」とネガとポジの関係になっている。「樫ノ木大学の野宿」もii類c型であろう。「ポラーノの広場」と同じような作品構造を持っており、〈樫ノ木大学士〉・〈貝の火兄弟商会〉〈ラクシヤンの四人兄

弟)・(ヒームカさん)・(熊出街道)といった造語が活躍する。また、(ジッコさん) (ホンブレンさま) (オーソクレさん) (バイオタさん) (プラヂョさん)と
いった造語は、鉱物用語(磁鉄鉱) (ホルンブレンド) (オーソクレス) (バイオタイト) (プラデオクレス)からの造語であることを、テキスト内部で明かしている。そのようにできているテキストにオパールの産地としての(葛丸川) (花巻の北に実在) がさりげなく登場する。それは、ルビーの産地としての(ビルマ)と並列関係に存在しており、実在の地名が、謎のように作品のリアリティーを高めている。

四 (クラムボン)とは

「やまなし」における造語(クラムボン)を考察するため、これまで宮沢賢治の童話作品における造語の構造と機能を述べてきた。(クラムボン)の造語構造は未詳(諸説の乱立)だが、造語機能は推定可能と考える。「やまなし」のテキストにおいて(クラムボン)は最初に現れるのみである。そこで試しに、(クラムボン)の登場する箇所をテキストから削除してみると、「やまなし」という作品は、難解どころか、極めて理解しやすい作品となる。五月(春)と十一月(晩秋) (注)との対比構造の上に、

(カワセミ)がもたらす死の不安と(やまなし)がもたらす生の喜びが浮かび上がってくる。なぜ作品舞台が川の中なのかという問いは、拙論『ペンネンネンネン・ネネムの伝記』試論(前出)において分析したつもりだが、宮沢賢治の世界認識は、常に重層的な《空間構造》を有しており、一義的な解釈を拒み続けていると言える。

宮沢賢治は、「やまなし」という作品になぜ(クラムボン)を登場させたのか。(クラムボン)がなぜ造語でなければならなかったのか。造語機能の面から(クラムボン)を考えた場合、西郷武彦の「仮名(けみょう)」説はそれなりの意義を持つ。仮名(けみょう)とは、実名(じつみょう)の対義語で、仏教語として、実体のないものを意味する。仏教の認識論では、継続する実体の存在を認めず、常に少しずつ変化していると考えられる。それを諸行無常、有為転変といった語で表す。賢治は仏教語を用いず、読者に自己の世界認識を表現しようとしたのである。もし仏教語を用いてしまえば、読者にとっては単なるイデオロギーに過ぎなくなり、「やまなし」という作品を拒絶せざるを得なくなるからだ。カニの兄弟の会話の中において(クラムボン)は、笑い、死にまたは殺され、そして再び笑う存在である。その理由をカニの兄弟

は知ってはおらず、弟に聞かれた兄は「わからない」と答えるのである。生存するとはそのようなことだと宮沢賢治は考えているのだろう。生の本質や死の本質を答えられるものは、誰もいないと言つてよい。

最後に、〈クラムボン〉について、諸説の一つとして論者の案を付け加えておきたい。〈クラムボン〉にこだわるのは、「やまなし」のテキストに〈イサド〉という造語があり、その造語構造が明らかになっているからである。「種山ヶ原」のテキストに「伊佐戸」の語がある。そのため、「伊佐戸」は実在する岩谷堂からの造語だと推定可能になる。岩谷堂は岩手県の江刺地方（種山ヶ原の麓）にあり、北上川舟運の交易中心地として栄えた場所であった。物資の輸送が東北本線に移ったことから、次第に衰退し、現在は人首川が北上川にそそぐ河口の小さな町となっている。岩谷堂たんすは伝統産業として有名である。論者は〈クラムボン〉を実体的なものとは考えていないので、造語機能の視点も加え、仮名（けみょう）を連想させる英語 *crandle*（砕け散るの意）を語源として想定したい。カタカナ表記としては「クラムボー」か「クラムブル」となるだろう。語尾を「ン」にする造語の例は、「蛙のゴム靴」の蛙語（へロン）があり、蟹語として〈クラムボン〉と共通する。外国語を語源とする例は、

「ゼロ弾きのゴーシュ」の〈ゴーシュ〉が「左・不器用」を意味するフランス語 *gauche* を語源としている可能性を挙げることができ、英語 *crandle* の語尾を「ン」に変化させ〈クラムボン〉としたという説も、牽強付会とは言い切れない。

論者は、宮沢賢治作品の特徴の一つとなっている膨大な造語に関し、造語構造と造語機能の両側面から体系的に分析していくことを、意義あることではないかと考えている。

（注）——新聞発表形式では「十二月」だが、誤植と判断し、下書稿に見える「十一月」を用いた。

付記 本論は、二〇一九年、韓・日・中三言語文化比較研究シンポジウム（ソウル光云大学）で発表したものである。

（本学教授）